

瀧上恭子 著

『バイオ・コリアと女性の身体

——ヒトクローン ES 細胞研究「卵子提供」の内幕——』

本書のテーマは、2005年に韓国で起こったヒトクローン ES 細胞論文捏造事件である。

黄禹錫前ソウル大学校獣医科大学教授は、2004年にヒトクローン胚からの ES 細胞樹立を、続いて翌年には「患者対応型 ES 細胞」の作製成功を『サイエンス』誌に発表した。患者と同じ遺伝子をもつクローン胚から、生殖細胞を含む種々の細胞に分化できる ES 細胞をつくれば、拒絶反応のないオーダーメイドの治療用細胞が出来上がる。

各種難病に対する画期的な治療法を提供する可能性を秘めたヒトクローン ES 細胞誕生の朗報は韓国の人びとを熱狂させ、バイオ立国を目指す「バイオコリアの夢」が実現したかに見えた。しかし、最初の論文が発表されて3ヶ月も経たないうちに、『ネイチャー』誌は黄チームの研究員の卵子提供を報道し、研究過程における生命倫理上の問題を指摘した。

その後、研究用卵子入手過程の実態調査によって、提供された卵子の大半が「売買卵子」や「財産上の利益供与卵子」であったことが明らかになった。

2005年の論文発表後には論文の真偽に関する内部告発がMBC(韓国文化放送局)に寄せられ、『MSB-PD手帳』取材班の調査が始まる。ES細胞の真偽をめぐる報道と関係者の証言が続く中で、ソウル大学校も調査委員会を立ち上げ、年末には論文が捏造されていたことが判明した。2006年『サイエンス』誌は両論文を正式削除し、ソウル中央地方検察庁は、研究費横領と生命倫理法違反によって黄氏を在宅起訴した。

その後韓国では、前代未聞のスキャンダルとなったこの事件について、国策として展開された幹細胞研究の政治性や「黄禹錫神話」をつくりあげたジャーナリズムの責任が問われ、言論界、科

学界、生命倫理学者の自浄努力が求められた。それだけでは事件の真相が十分に解明されないとする著者は、研究を可能にした卵子の提供過程に着目した。本書では大量の卵子の調達過程を描き、そのプロセスを、卵子を提供した女性を取り巻く韓国社会の文化伝統に照らして考察している。

本書の概要は次の通りである。

第一章「メイド・イン・コリアのヒトクローン ES 細胞」の構想

論文捏造が明らかになって久しい今も黄禹錫の復活を支援する人がいる韓国の現状(一「バイオ・コリア」の見果てぬ夢)をふまえて、韓国人の民族心と愛国的科学主義を軸に「黄禹錫神話」が形成される経緯をたどり(二「黄禹錫神話」の形成と愛国的科学主義)、最先端科学技術における国際的主導権を握って莫大な産業利益を得ようとする韓国の国家戦略(三 バイオ立国のシナリオ)を明らかにしている。

次いで、2004年と2005年に『サイエンス』誌に掲載された2論文作成にあたって黄前教授等が展開した研究用卵子獲得の戦略を描き(四『サイエンス』論文に描かれた研究用卵子獲得の戦略)、ES細胞論文捏造の副産物となった「処女生殖 ES 細胞」にもふれている(五「一番幹細胞(NT-1)」の終わりなきドラマ)。

第二章 先端科学をめぐる生命倫理問題と「不妊治療」

十分な倫理審査を経ないままに進められた研究過程で、非倫理的な方法で提供された大量の卵子が使用されていた事実を示し(一 研究用卵子提供をめぐる生命倫理問題)、黄チームの研究員による卵子提供に許容的な韓国社会を、「女性の存在価値を専ら跡継ぎを産むことに求める家父長主

義的女性観に利他主義と国家主義が加わって、子供を産む義務を果たし終えた女性が、自身の妊娠目的に使うことのなくなった卵子を他者や国家のために役立てることが奨励される社会」ととらえている（二 研究員の卵子提供に対する韓国社会の反応）。

そして、不妊女性救済策として容認されている卵子提供の名を借りた「卵子売買市場」の存在が、黄チームへの売買卵子提供の温床となったと指摘する（三 韓国の「不妊治療」における卵子提供と卵子売買）。さらに、バイオ立国政策促進の中で生命工学研究機関と癒着した不妊クリニックが、当初は生殖資源であった「凍結余剰胚」を大量の研究資源として黄前教授に不正提供した事実を明らかにしている（四 研究用卵子大量不正提供の構造的背景）。

第三章 研究用卵子提供の内幕

生命倫理法を犯して卵子売買を仲介していた「DNAバンク」に対する警察の摘発を機に黄チームの売買卵子受給疑惑が浮上し、MBC韓国文化放送局のスクープによって真相究明が始まる経緯をたどり（一 「黄禹錫事態」の勃発）、関係機関によってまとめられた報告書をもとに研究用卵子の入手過程を分析する（二 研究用卵子提供の実態）。

また、黄教授の研究に卵子を提供するように誘引された提供者の葛藤を具体的に示し（三 卵子提供者の語る真実）、卵子ドナーの間に生じた不妊治療用卵子提供者と研究用卵子提供者の階層分化にも言及している（四 卵子提供者の階層分化）。

第四章 韓国女性達とヒトクローンES細胞研究をめぐるバイオポリティクス

黄チームの卵子入手方法をめぐる倫理論争が激化し、研究の継続が危ぶまれる中で起こった卵子寄贈キャンペーンの動向にふれ（一 研究用卵子寄贈運動の展開）、研究用卵子を提供したことによる癒しがたいトラウマを抱えた女性研究員（二 研究者用卵子提供者のトラウマ）や卵子提供後肉

体的精神的後遺症に悩む女性（三 研究用卵子提供の後遺症に苦しむ女性達）の訴えを詳述している。

次いで、バイオ立国を掲げて女性の身体の研究資源化の推進を図る生命工学界、それを支える女性達、女性の身体の道具化と人権侵害を告発する女性団体などさまざまな立場の人びとが「不妊治療」の最前線で対峙する状況を描く（四 卵子の研究資源化に対する異議申し立て）。

最後に、「黄禹錫事態」後のバイオポリティクスを展望しつつ、倫理問題のない幹細胞として注目される「iPS細胞」研究を介したヒトクローン研究の問題点を指摘している（結語 ヒトクローンES細胞の夢の跡）。

本書は、韓国の水子供養や代理母出産など著者が取組んできた生命倫理に関する研究の積み重ねの上にまとめられた力作である。多彩な資料に裏付けられた各章の内容からは、ヒトクローンES細胞研究における「卵子提供」の内幕が鮮やかに浮かび上がってくる。「黄禹錫事態」は隣国で起きた特殊なスキャンダルではなく、生命工学が進展する現代社会が抱える課題を浮かび上がらせた象徴的な出来事であった。

生命倫理をめぐる諸問題を、さまざまな国や地域の伝統文化を無視して一律に論じることには無理がある。熾烈な国際競争によってグローバルに生み出される科学技術をローカルに使いこなすためには、それぞれの社会の宗教や文化の状況を多面的に捉えて独自の生面倫理を打ち立てる必要がある。本書が指摘する大量の研究用卵子提供を可能にした韓国の儒教的伝統について、父系血統主義が現代社会でどのように再生産されているのか、さらなる分析が期待される。

（杉山 章子）

[勁草書房, 〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1, TEL.03 (3814) 6861, 2009年2月, A5判, 256頁, 3,200円+税]